深志同窓會々報

題字　松中10回卒文学博士 中山久四郎筆
発行所　松本市蟻ヶ崎3－8－1 松本深志高等学校内 深志同窓会
発行人　花岡堅而
編集　会報委員会
印刷　電算印刷株式会社

10月19日に120周年記念式典

120周年を記念して屋上に翻る12メートルの大鯉のぼり

募金目標達成へご協力を

百二十周年の募金目標は一億一千万円です。平成八年五月十五日現在八千三十五万六千円のご芳志をいただき達成率は七三％となっております。募金委員会では八月末を三次締め切りとし、一〇〇％達成を呼びかけています。

八月末に三次締切り

〝熱い思い〟の募金相次ぐ

吉野文六氏から

平成七年の総会に「最近の国際情勢と日本の進路」と題して記念講演をしてくださった吉野文六氏（元西ドイツ大使、国際経済研究所長、松中57回）は帰途、松本駅まで見送りに来た同窓会幹部に「百二十周年事業の募金に役立ててください」と講演の謝礼十万円をそっくり渡されました。

小松孝志先生からも

「主人が健在でしたら、どんなにか百二十周年を喜んだことでしょう。小松の心としてお受け取りください」

平成七年の同窓会総会に小松孝志先生（前副会長、平成四年逝去、松中52回）の茂千代夫人から三十万円が届けられました。

小松先生は長野県教育長として活躍、同窓会では副会長兼刊行委員長として貢献されました。

〝亡き長男の心です〟

桜井潤作氏からは募金とともにこんな胸熱くなるお便りをいただきました。

「長男佳範（深志43回）は平成五年、千葉大学三年の夏、交通事故で他界しました。アパートの壁に深志高校の校歌を貼り、友人たちに母校の自慢話をしていたそうです。生きていたら百二十周年に喜んで参加したと思います。息子に代わって協力させていただきます」

全て母校のおかげ

「当年八十三歳、松中50回卒業生として創立百二十周年まで長らえることは感無量です。実行委員の名簿のトップに近いところに同級の鈴木昌造君が名をつらねていて力強く思います」と真峯良次氏。

「実行委員の方々まことにご苦労さまです。小生の今日あるは、全て松中での勉強のおかげと考えています。感謝をこめて」と木村美保氏（松中69回）。

若い会員も続々

「高校時代の学問・クラブ活動・生徒会活動・友人との交流・恩師の方々から授けられた諸々が、今日の私の大いなる糧となっております」と三原好博氏（深志29回）。

「社会人になった今でもよく深志のことを思い出します。本当に深志で学ぶことができてよかったと感じています」長田めぐみさん（深志42回）。

中高年の思いも

「深志のお陰で自分の今日と、今日の意義がある。有難き、懐かしい母校の発展とこのたびの記念事業の成功を心から祈っています」と小川尚克氏（深志6回）

「昨年、家族で松本に行く機会ができ、市街をみてまわり、深志のとんぼ祭にも立ち寄ることができ、感激しました」と二村隆男氏（深志4回）。

大北支部の心意気

大町北安曇支部は平成八年六月二十一日ひらいた総会の席上、母校百二十周年のために寄金をしようと一決、十万円を穂苅会長代行に渡しました。

多彩な事業

記念式典
◇平成8年10月19日㈯午前11時から式典
大体育館で（受付開始10時から）
◇祝賀会　午後１時から講堂で
図書館兼同窓会館の建設基金
「ミレーとバルビゾン派展」
◇９月28日㈯～10月20日㈰
◇日本民俗資料館
120周年記念演奏会
◇９月23日（月・祝日）開演午後２時
◇長野県松本文化会館大ホール
記念講演会
◇10月12日㈯午後１時半から
◇松本市中央公民館
同窓会会員名簿の刊行
深志人物誌IIの出版

母校愛示すとき

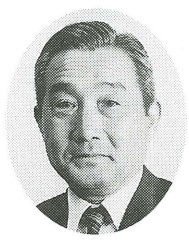
穂苅甲子男

母校創立百二十周年に当たり同窓会のみなさまのご協力に心から感謝申し上げます。

―この二年間は瞬時に過ぎた感がいたします。

会員のみなさまの熱意によりここまで順調に推移しております。

記念事業の企画立案、実行委員会の発足、各委員会による諸準備の着手と進行や志音会による「第九演奏会」、講演会、深志人物誌IIの出版など多種多彩な百二十周年です。



新しい図書館兼同窓会館の建設基金をはじめ記念式典、同窓会員名簿の刊行、「ミレーとバルビゾン派展」

これらの事業を成功させようと、会員のみなさまからは熱い母校愛の寄金を頂戴し感激を新たにしております。目下のところ募金目標の達成は、あとひと息という額でございます。地域への報恩感謝と母校の発展のため、さらに特段のお力添えをお願いいたします。

（同窓会会長代行）

ミレー中心に80点

心に響く名作の数々

ミレーとバルビゾン派展

ミレーとバルビゾン派展は、百二十周年記念事業実行委員会と中日新聞社が主催して九月二十八日から十月二十日まで、松本市の日本民俗資料館で開催します。

山梨県立美術館のミレーコレクションをはじめとした心に響くミレーの作品二十九点を中心に、バルビゾン派の代表的な画家総勢三十七人の秀作約八十点を展示。海外にあるミレーの作品二点も紹介します。ミレー以外の顔ぶれはコロー、ルソー、デュプレ、ディアズ、トロワイヨン、ジャック、クールベ、ドービニーらです。本展を通じ、当時変わりつつあったフランス美術の自然に対するとらえ方に、あらためてスポットを当てようというものです。

当日入場券は一般九百円（前売り、または二十人以上の団体七百円）、高校生・大学生六百円（同四百円）、小中学生三百円（同二百円）で、多くの人に鑑賞機会を提供するため、松本市内の全小中学生には無料の特別鑑賞券を配布、母校の在校生と教職員には招待券を贈るなどします。

なお「松本深志高校創立百二十周年記念事業」と標記した図録を作り、会場で販売する予定です。

ミレーの「種をまく人」1851年、リトグラフ、個人蔵

ミレーの「落ち穂拾い」1855年、エッチング、個人蔵

図書館と同窓会館

二棟改築を機に建設へ

新しい図書館兼同窓会館は、県による校舎改築長期計画を機に、二十一世紀にふさわしい高度な機能を備えた施設を校舎内に建設、母校に寄付しようという構想です。手始めに建設資金の一部として三千五百万円の基金をつくり、改築計画の進捗に応じ、今後、寄金の拡大を図っていくつもりです。

中等教育資料室も併設

母校の改築につきましては、文化的価値の高い第一棟（管理棟）と講堂は永久保存の方針が決まっていますが、第二棟（理科棟）、生徒昇降口は全面改築されることになっております。

現在の「図書館兼同窓会館」は明治四十三年（一九一〇）、初代校長小林有也先生在職二十五周年を記念してつくられた「頌徳文庫」がルーツです。その後、大正十一年と昭和十年、四十二年の計三回、いずれも同窓生の寄金によって建て替えが行われ、今日に至っております。

第二棟の改築計画は、平成九年度までに設計を終え、十年度には着工の運びといわれています。自治の精神と伝統を象徴する新図書館兼同窓会館には、中等教育資料室を備え、創立百十周年記念事業として収集整理した関連資料を納める予定です。

なお、ことしに入って小林有也先生著『代数』の自筆原稿とみられる貴重な資料も見つかっています。

120周年記念事業募金額一覧表

（平成8年5月15日現在）

卒業回	目標額(千円)	件数(件)	募金額(千円)	達成率(%)	備考
松中49以前	1,710	55	1,115	65.2	
松中50	375	10	235	62.7	
51	390	26	460	117.9	
52	465	29	520	111.8	
53	480	29	490	102.1	
54	525	27	470	89.5	
55	555	49	825	148.6	
56	585	37	550	94.0	
57	600	46	680	113.3	
58	705	57	920	130.5	
59	720	55	720	100.0	年次会まとめ
60	840	44	695	82.7	
61	975	85	725	74.4	年次会まとめ
62	990	80	1,275	128.8	
63	1,065	97	1,803	169.3	年次会まとめ
64	1,155	108	1,735	150.2	
65	1,215	113	2,010	165.4	
66	1,320	73	1,335	101.1	
67	1,320	120	1,600	121.2	年次会まとめ
68	1,455	111	1,875	128.9	
69	深志1回へ計上				
70	深志2回へ計上				
小計	17,445	1,251	20,038	114.9	
深志1	2,145	127	2,375	110.7	
2	1,890	139	1,500	79.4	年次会まとめ
3	1,935	130	1,935	100.0	年次会まとめ
4	2,850	158	2,530	88.8	
5	2,730	209	2,730	100.0	年次会まとめ
6	2,295	127	2,405	104.8	
7	2,280	154	2,630	115.4	
8	2,610	99	1,955	74.9	
9	2,625	103	2,705	103.0	年次会まとめ
10	2,625	126	2,700	102.9	年次会まとめ
11	2,715	171	2,725	100.4	年次会まとめ
12	2,595	97	1,530	59.0	
13	2,820	115	1,965	69.7	
14	2,775	156	2,340	84.3	年次会まとめ
15	2,820	77	1,125	39.9	
16	2,720	80	1,220	44.9	
17	2,820	70	1,010	35.8	
18	3,060	82	1,500	49.0	年次会まとめ
19	3,030	91	1,344	44.4	
20	3,000	86	1,330	44.3	
21	2,925	109	1,710	58.5	
22	2,700	74	1,030	38.1	
23	2,535	68	925	36.5	
24	2,310	94	1,165	50.4	
25	2,310	70	885	38.3	
26	2,355	34	423	18.0	
27	2,520	57	785	31.2	
28	2,475	81	985	39.8	
29	1,845	71	892.5	48.4	
30	1,395	54	711	51.0	
31	1,125	38	440	39.1	
32	1,125	64	745	66.2	
33	1,035	41	475.5	45.9	
34	975	43	480	49.2	
35	975	45	560	57.4	
36	930	38	385	41.4	
37	825	43	436.5	52.9	
38	810	41	460	56.8	
39			245		
40			185		
41			190		
42			345	(2,683)	
43	2,665	263	325	100.7	
44			288		
45			340		
46			275		
47			490		
小計	86,155	3,725	55,730.5	64.7	
夜中			2,063		
定時	4,500	241	1,915	88.4	
在校生	1,000	0	0	0.0	
その他	900	5	609.6	67.7	篤志者
合計	110,000	5,222	80,356.1	73.1	

盛り上がる「第九」

志音会の練習、最高潮

指揮は飯沼信義氏（作曲家）

百二十周年記念演奏会は、九月二十三日（祝日）長野県松本文化会館大ホールで行われます。

合唱の練習も熱心につづく

記念コンサートは二部構成で、第一部は「懐かしい歌」。

志音会合唱団が、「祝記念祭歌」「故郷」「赤とんぼ」「夕やけ小やけ」「遙かな友に」「浜辺の歌」「信濃の秋」を吉野恵美子さんの指揮、臼田由香里さんのピアノ伴奏で歌います。

第二部がベートーベンの「交響曲第九番・合唱付」で同窓生・在校生を主体とする「第九」演奏オーケストラと「第九」演奏合唱団によるコンサート。指揮は作曲家の飯沼信義氏（桐朋音楽大学音楽学部長、深志9回）、コンサートマスターは村上豊氏（才能教育研究会指導者）が務めます。

管弦楽団は三月十七日に全国から集まって第一回の練習を本番の会場になる県松本文化会館で行いました。この日は合唱との合同練習ということもあって、「第九」四楽章が中心。指揮者の飯沼信義氏、コンサートマスター兼トレーナーの村上豊氏はじめ、トレーナー兼アドバイザーの小沢千尋氏（武蔵野音楽大、深志17回）を迎え和やかなうちにも厳しい練習でした。

五月の三、四両日は松本室内合奏団のみなさん、信州大学交響楽団のメンバーの協力を得ての練習となりました。飯沼氏は作曲家から見たベートーベンの「第九」の緻密な分析に基づくきめ細かな本格的指導を行い、今までの「第九」と違った練習方法と曲の解釈に参加者は深い感銘を受けました。

なおこの日、オーケストラの新井重明氏（深志4回、弁護士）が三月に続いて参加、若い団員と一緒に演奏している姿が印象的でした。

記念演奏会

◇とき　9月23日（祝日）開場午後1時半、開演2時
◇ところ　長野県松本文化会館大ホール（全席自由）
◇参加券　一般二千円、学生千円

ハッパ会員から「機」

同年会活動ますます盛ん

深志同窓会の特徴の一つは活発な年次会活動です。各年次会から届いた報告を紹介します。

▽松中六十四回「ハッパ会」

松中六十四回卒業生の会名をハッパ会と称す。春秋二度例会を開いている。

卒業時一九〇名。現在一四〇名。鬼籍に入りたる者約五〇名にて一クラスが消滅したことになる。現在の会員一四〇名の消息は確かで同窓会からの郵便物が戻されるもの一通もなし。完璧な年次会なり。

母校建学百二十周年の今年、わがハッパ会員全員が古希を迎えた。募金も目標額を大幅に上回った。各回多少のバラつきはあっても松中の部は総計で一〇〇%を突破している。しかるに深志の部の募金額は極めて低調にて目標額の六五%程度だ。（五月十五日現在）

若い人々が年金受給者の後塵を拝しているようでは困るのである。卒業回数二桁台の年次会の中には、同年会を全然開いたことがない会があるということに至っては実に言語道断。従って決まった役員がなく、同窓会事務局が誰へ連絡したらよいか戸惑っていると聞く。われわれ旧制中学の会員と違い今は会員数も倍。取りまとめの苦労も倍になると思うが、深志同窓会発展のために一大奮起を望みたい。このままでは完全に先細りである。老婆心までにひとこと。（丸山　嵩一）

▽松中六十七回

平成七年は戦後五十周年に当たり全国各地で記念行事が催された。われわれ松中六十七回生にとっても卒業五十周年で、六月十七日に記念の集いを母校・浅間温泉・小布施・善光寺と回りながら行なった。昭和十六年入学、二十年四月卒業の一団、奇しくも集まった者六十七名であった。（矢ヶ崎昭三郎）

▽深志六回

平成七年十月十五日、母校講堂に百五十余名が参集卒業四十周年を祝った。

記念誌の発行。ビデオ撮影も行なった。二十周年を機に五年ごとに開催している。アリヴェデルチ！（花岡　頼充）

▽深志十六回

平成六年十月八日、母校講堂で卒業三十周年の記念式典を行なった。約百二十名が集まり、母校後輩に八十万円相当の楽器を贈呈した。（藤野　良文）

▽深志十七回

平成七年九月二十二、二十三日の両日、卒業三十周年の集い。遠足・ファイヤーストーム・思い出写真展・恩師の授業など多彩な行事で旧交を温めた。（桜井　政男）

▽深志二十回

平成二年の卒業二十周年に「とんぼ二〇会」の名称に。卒業二十五周年記念式典を行なった。母校で運動会、上島忠志先生の記念講義、母校に百万円を寄付。

上島先生は今年五月二十日長逝された。ご冥福をお祈りします。（田内　正一）

お知らせ

写真集「深志物語」は同窓会、学校とは一切関係ありませんのでご了承ください。

会員名簿'96年版

所属クラブも掲載

百二十周年記念事業の一環として同窓会会員名簿九六年版が刊行されます。今回の特徴は次の三点です。

まず同窓会OBのつながりが、さらに充実発展するよう、在学中の所属クラブ名を掲載します。これによって運動各部、学芸各部が連絡を取り合い、〝もう一つの同窓会〟活動が推進できます。

特徴その二はグラビアに「二棟物語」が紹介されることです。アカシヤ会の拠点だった美術教室や化学、物理、生物などの各教室は格別思い出深いものがあります。改築が日程に上っている第二棟の姿を特集いたします。

もう一つの特徴は、振り込みイコール予約申し込みとする点です。刊行委員会は「前回、予約をしながら振り込みがなかったケースがあり、その分の名簿が余ってしまいました。今回はお振り込みをもって予約申し込みとします。名簿用の振込用紙をお使いください。」とのことです。また不明者の情報提供も年次にこだわらず是非寄せてほしいと呼びかけています。

深志人物誌II

百十周年記念に出版された『深志人物誌』に続いて百二十周年の今年は『深志人物誌II』が出ます。前回同様すべて物故者が対象。

今回取り上げられるのは小林有也先生ほか次の方々です。（五十音順、敬称略）

青木誠四郎（心理学）青柳優（文芸評論）池上鎌三（哲学）犬飼哲夫（動物行動学）上原良司（『きけわだつみのこえ』）臼井二尚（社会学）臼井吉見（評論家、作家）岡茂雄（岡書院）岡田甫（教育者）、上條愛一（労働運動家）上條俊介（彫刻家）川越虎之進（画家）神林浩（陸軍最後の医務局長）郷原古統（日本画家）、鈴木雅次（土木工学、文化勲章受賞）田中穂積（経済学者、早稲田総長）田中義麿（遺伝学）高橋玄一郎（詩人）中村武志（作家）中山久四郎（中国史。同窓会報題字は氏の揮毫）西村真琴（生物学者）樋口秀雄（政治家）平林広人（アンデルセンの翻訳者）藤原鎌兄（中国で新聞発行）降旗徳弥（元松本市長）増田甲子七（政治家）松本克平（新劇俳優）丸山恒人（実業家）宮坂哲文（教育学）百瀬結（日本ビクター会長）湯本武比古（大正天皇教育掛）

募金・名簿・人物誌

払込用紙は3種類

募金の三次締め切りは八月末です。名簿と人物誌は払い込みをもって予約申し込み受け付けとなります。別々の用紙ですのでご注意ください。

募　金

◇口座番号　長野00560＝7＝3326
◇払込先　松本深志高等学校創立120周年記念事業実行委員会

名　簿

◇口座番号　長野00590＝4＝26618
◇価格　四〇〇〇円
◇払込先　深志同窓会名簿刊行委員会

人物誌

◇口座番号　長野00570＝3＝1079
◇価格　三〇〇〇円
◇払込先　深志同窓会人物誌刊行委員会

※ご注意

①払込手数料は同窓会の負担となっておりますので支払わないでください。

②振込用紙に松中・夜中・深志・定時の何回卒と必ずご記入ください。

③募金、名簿、人物誌と三種の払込用紙となります。お間違えのないようにご留意くださるようお願いします。

母校の近況

想い出多い第二棟は平成十年に姿を消す

サッカーが大活躍

とんぼ祭の時期が課題に

前会報発行直後の松本サリン事件（平成六年）には本校も複数の生徒が被害を受け、学校もマスコミに大変苦しめられました。とんぼ祭さえ微妙な影響を受けましたが、しかし多湖生徒会長の下、執行部は一生懸命頑張って跳ね返してくれました。

この年から学校側では中村磐根校長のイニシアチブの下、生徒の学業への取り組み状況への憂慮と新教育課程実施・月二回土曜日休日制度などに対応して、本校教育のあり方の総点検を開始、現在二年目に入っています。中でも当面の大きな課題はとんぼ祭の時期。学校側は平成六年十一月、生徒に対して夏休み前実施案を提案しました。以来生徒部を窓口に検討を重ねてきましたが、未だ結論に至らず、生徒会は平成八年は八月実施を要望してきました。学校側は検討の結果、本年はこの要望を受入れました。

大学受験に関しては、平成七年の受験は久しぶりに現役合格率が五〇％を越えました。本県で「学力向上」が叫ばれて久しいのですが、五〇％は深志としても久しぶりのことです。

本年度は、二棟改築のボーリング調査が行なわれます。これらについてPTAや諸先輩方の後援を学校は望んでいます。

平成六年は生徒会長がなかなか決まらず苦しんだ末に、初めての女性会長が誕生しました。一方で、この間、部活では陸上・空手・サッカー・棋道部などが大活躍しました。

特筆すべきは平成七年夏のサッカーの北信越大会優勝・「全日本ユース選手権」出場です。会場は室蘭市。経費もかさみ、同窓会からも大きな応援がありました。陸上は短距離で全国大会に出場しました。

赤とんぼ・アカシヤ・落研・地歴会・博物会・音楽部など結構盛んで、マスコミの注目も受けています。図書館における「自主ゼミ」などの地道な活動も見逃せません。こうした一方で前記のように生徒会の成立が心配されるという事態が起こるというところに今の深志生の一大問題点がある、と憂慮の声もあります。

支部だより

蛍雪会　平成八年一月二十七日、松本市内のホテルで新年会を開きました。先輩マリーン草間のマジックショーにたんのうし、募金目標達成を誓い合いました。

東北支部　長年、支部長、顧問として東北支部を支えた藤森恒雄氏（松中四十二回）が昨年十二月二十三日逝去されました。矢沢淋氏（松中六十五回）から松沢大樹氏（六十六回）に支部長が交代しました。

東京支部　平成七年度総会は七月五日夜、ホテルトウキョウで会員二百五十名余が参加、盛会でした。八年度の総会は七月十一日の予定です。

東海支部　平成八年二月十六日、名古屋駅前の国際サロンでひらきました。穂苅会長代行、中村校長が出席、参加者は六十名でした。

関西支部　阪神大震災から一年余が経ちました。その節は同窓会からお見舞いを頂き厚く御礼申し上げます。昨年予定していた総会は中止しました。

九州山口支部　平成八年四月八日、第十一回例会を博多でひらきました。現在の会員数は六十二名です。

東北信支部　平成七年度の総会は七月七日にひらき、三十名余の会員が参加しました。八年度の総会は六月二十日開催されました。

大町北安曇支部　平成元年に平林照雄氏を会長に結成した「大町支部」は今年から北安曇郡一円に広げ「大町北安曇支部」に。会員は二百名を越えました。

蜻蛉抄

百二十周年の記念式典、美術展、「第九」の演奏会、講演会、同窓会員名簿、深志人物誌Ⅱ等々、秋へ向けて諸準備が進んでいます。事務局を担うのは磯辺可衛さん（五回）と小野知子さん（八回）の名コンビ。事務局へ届く〝熱い思い〟のたよりがたいへん楽しみとのことです。

その一つが高野健介さん（松中四十八回）からのチャンチン（香椿）についてのおたよりです。「松中敷地跡に残っているチャンチンは小生昭和二年卒業当時、少なくとも三、四十年の成木であった。（中略）素人目にも百年は経っていると思う。」

中国原産で、明治初年、日本に移入されたこの木は松中時代の〝生き証人〟ということになります。松本城の公園内「松本中学校跡」の碑の前に今も健在です。

今回の会報編集委員は次のみなさんです。（敬称略、◎は編集長、○は副）○伊藤芳郎、磯辺可衛、小野知子、◎北村明也、鈴木史朗、山本伍朗及び学校職員青山誠、植原操、佐々木節男、宮下誉久。

校長、教頭先生が転・退任

ことし三月、中村磐根校長が退職、猪熊啓司教頭が小海高校長に栄転されました。後任の校長には平林尚武先生（深志八回）、教頭には昭和四十一年～五十一年深志に在職した青山誠先生が着任しました。

校長　平林　尚武氏

このたび松本深志高校にお世話になることになりました。同窓の皆様方にとって、心のふるさとたる母校のますますの発展のため、いたずらに歴史や伝統に安住することなく、常に「深志教育の理想」を追求し続けながら、怠りなく、努力してまいりたいと思います。

とりわけ本年は創立百二十周年にあたりお世話になることが多いかと思います。ご支援よろしくお願いいたします。

教頭　青山　誠氏

今春、県下で最も新しい明科高校から、今年百二十周年を迎えようとする本校に赴任しました。時空間ショック的動揺に陥る中、「不易流行」の不易の部分を師弟同行の探究者達に見る思いです。

節目の年、そして二棟全面改築のボーリングが始まろうとするとき、同窓生のみなさまのご鞭撻を衷心よりお願いする次第であります。

前校長　中村　磐根氏

三年間お世話になりました。一年目は気負いがあり、二年目にはいろいろなものが見えてまいりました。三年目は楽しい境地でした。

思い出に残るのは通称「校長ゼミ」、正式には講座「ヨーロッパ精神史の旅」。明治期には尚志社などの自治団体が、昭和戦後期には博物会・地歴会などの活動がありました。

二十一世紀の深志高校には、どんな形の自治的活動が生きているでしょうか。

前教頭　猪熊　啓司氏

二年間、多くの先輩諸氏に交わらせていただき、貴重な経験をいたしました。

百二十年の伝統から滲み出すエッセンスはたいへんなもので、同窓会員諸氏にはこのエッセンスをより豊かなものにしていただきたいと思います。

生徒達は「深志」というブランドに甘えることなく自己を厳しく見つめて新たな伝統を加えることを望んでやみません。感謝。

上島忠志先生を悼む

平成八年五月二十日、同窓会の副会長でもあった、上島忠志さんが亡くなられました。〝上忠さん〟と呼ばれて生徒や同僚から敬愛され、深志に二十五年在職。「俺は深志の教師で、長野県の教員ではない」との上忠語録は語り草になっています。

深志10回生の卒業35周年で話す上島忠志先生

上忠さんは昭和三十年深志に赴任されました。当時岡田甫校長は新しい校風樹立の意欲に燃え、教師陣の充実に熱心でした。東大法学部を卒業後、読売新聞の記者だった上島さんを岡田先生は懇望して深志の教師陣に迎えたのでした。

深志での上忠さんは、まるで水を得た魚のようでした。特に陸上競技部の顧問としてよく面倒を見ていました。生徒のころ陸上部にいたこともあって格別の思い入れだったようです。陸上競技部はOBたちが「天馬会」を組織、上忠さんは、その世話もしていました。お孫さんに天馬と命名したほど心底、天馬会が好きだったようです。

県教委の方針で深志から他校に転任させられ、やがて教職を去った上忠さんは再びジャーナリズムの世界で活躍を始められました。地元紙の編集長を務める傍ら「女鳥羽の岸辺から」という時評を書き続け、特に教育問題を取り上げることが多く、平成七年七月六日の最終稿まで三百八十回に及びました。

晩年、同窓会の副会長として貢献された上忠さんは最後まで深志という青春に灯をともし続けた人でした。

深志の「青春の灯」ランナー

（藤岡　改造）